

## 力まない信仰

丸山 勉

### [聖書] コリントの信徒への手紙二 2章14節～3章6節

神に感謝します。神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連らせ、わたしたちを通じて至る所に、キリストを知るとい知識の香りを漂わせてくださいます。救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。滅びる者には死から死に至らせる香りであり、救われる者には命から命に至らせる香りです。このような務めにだれがふさわしいでしょうか。わたしたちは、多くの人々のように神の言葉を売り物にせず、誠実に、また神に属する者として、神の御前でキリストに結ばれて語っています。わたしたちは、またもや自分を推薦し始めているのでしょうか。それとも、ある人々のように、あなたがたへの推薦状、あるいはあなたがたからの推薦状が、わたしたちに必要なのでしょうか。わたしたちの推薦状は、あなたがた自身です。それは、わたしたちの心に書かれており、すべての人々から知られ、読まれています。あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です。わたしたちは、キリストによってこのような確信を神の前で抱いています。もちろん、独りで何かできるなどと思う資格が、自分にあるということではありません。わたしたちの資格は神から与えられたものです。神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました。文字は殺しますが、霊は生かします。

### [序] 人間パウロと、神様の慰め

今日から一ヶ月間は、**コリントの信徒への手紙二**を読むことになりました。先週まで読んできた**コリントの信徒への手紙一**の後にパウロが書いた手紙です。ここには、割とパウロ自身の赤裸々な告白が多く出てきます。自分がどれだけ大変な目に遭って伝道してきたかとか、つらい病気を抱えて苦しんで神様に祈ってきたとか、コリントの教会のことでは悲しみにあふれた手紙を書いたこととか、心を動かす「**人間パウロ**」の姿が伝わってくる部分が沢山あります。

そして、パウロはいつも神様によって支えられ、大きな慰めを頂きながら、**イエス・キリスト**を宣べ伝えてきました。その確信が、この手紙の最初の部分で既に書かれています。1:3～5をお読みします。

「わたしたちの主**イエス・キリスト**の父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神がほめたたえられますように。神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。」

本当に、パウロも、**私たちと同じように弱い人間**だったのですね。今はもうパウロのことは**大伝道者**と思い、新約聖書の多くの彼の手紙が今日、正典として読まれている訳ですが、まだ一世紀、パウロが生きて働いていた時というのは、パウロは敵対視され、誤解され、しかも、イエス様を信じる者たちからも「**あいつは正統な使徒ではない**」と、パウロのことを認めないという風潮が大きくなりました。そのよう中で、では、**イエス・キリストの伝道者としての資格**というものは何なのかという

ことが、今日の箇所の一つのテーマにもなっています。

今日は午後、一週間後に行われる、近隣の3人の牧師先生によって、8月の私の**就任按手式**に向けて「**川越教会に励ましと助言を頂く会**」の準備会をすることになっていますが、ここで最も問われることは、私たちの教会の新しい出来事を、**人間的な思い**によって決定するのも、前に進めていくのでもなく、川越教会と私自身が、**ここに神様が働かれているのだ、という確信**を本当に持っているかどうかということです。その意味でも、今日の箇所は本当に大切な箇所だと思われています。

## [1] 神から来る力

まず**3章**の方から見てみたいと思いますが、それでは、パウロにとって自らがキリストの弟子、また伝道者であることの**証明**というのは何によってなされたのでしょうか？これがとても面白いと思うのですが、パウロは2節で「**(コリント教会の人々よ、)推薦状はあなた方自身です**」と言っています。形になっている証明書は何も持っていない、しかし、**あなた方自身の存在**が何よりの証しなのだ、と。

当時は「**推薦状**」というものが効力を持っていました。「あのエルサレム教会のお墨付きか、それなら信頼しよう」という形で、当時のユダヤ人指導者たちは推薦状を持っていました。そういう者からすれば、かつてキリスト教会を迫害していたパウロなどは、推薦状も持たないくせに大きな働きをしている、それが許せなかったのだと思います。

けれども、信仰の世界で一番重んじるべきことは、人間の思いでなく**神様が起こしている現実**だと思えます。そのことはパウロ自身、自らの体験として痛いほど良く分っていました。人間的な「**資格**」を問われたのなら、パウロは何も言えないのです。しかしパウロは、「そんなに言われるなら気分が悪い。やめる」とは決して言いませんでした。何故でしょうか？福音を世界に伝えるために、**神様はかつて敵対者だった私をさえ器として用いるお方なのだ、という神様のご計画を確信していたのだ**と思います。だから人が何と言おうとやめられないのです。**5節**にある通りです。

**「独りで何かできるなどと思う資格が、自分にあるということではありません。わたしたちの資格は神から与えられたものです。」**

そうです。神様のご計画が前進しているのです。**その最たるものは、神様と人間の「新しい契約」が、イエス様によって既に始まっている、**ということです。それは一言で言うならば、神様に敵対するしか出来ない私たち人間たちへの、**一方的な赦し**です。私たちが懸命に神様に近づこうと努力するのではない、そんなことがもし可能であれば、人間は自らの力を誇って神様の上に立つような**高慢に陥る**ことを神様はよくご存知で、**神様が方がへりくだって、神の独り子であるイエス様が私たちの罪を全て身代わって下さったのです。あの十字架で。この主イエスをあなたの主とするならば、あなたは神様との絆、永遠の生命を確かに持つ。**これが「**新しい契約(新約)**」です。

**3章6節**でパウロはこう言います。

**「神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました。文字は殺しますが、霊は生かします。」**

パウロ自身が、**キリストのみわざの証し**なのです。彼は「**文字(律法)**」の限界を骨身に染みて体験しました。自分が救われたのは、ただ**神様の霊(聖霊)**の故だ。それを彼は疑うことなど出来ませんでした。人を救うのは人間の力ではなく、**キリストの霊の力**なのだ、あなたがたも同じ霊によって生

かされているのではないかと。

## [2] イエス・キリストの凱旋パレードに加えられて

前の章に戻る形になりますけれども、2:14 以下では、キリストに救いを頂いた自分は、またコリントの教会の人々は、「**キリストの香り**」を放つ存在となっている、と言います。パウロという人は、本当に表現力が豊かな人だと思いますけれども、今回読んでいて、私自身、一番心に留まったところです。

**「神に感謝します。神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連ならせ、わたしたちを通じて至るところに、キリストを知るとい知識の香りを漂わせてくださいます。救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。」**（14、15 節）

この最後の部分は口語訳聖書ではこうなっています。

**「私たちは救われる者にとっても、滅びる者にとっても、神に対するキリストのかおりです」**。この訳のほうピンとくる気がします。「**私たちはキリストのかおり**」—。

パウロはこの「**香り**」というのを、当時のローマの将軍の凱旋パレードになぞらえています。パウロにとって、**凱旋将軍はイエス・キリスト**です。**罪の支配に、十字架とお甦りで完全に勝利して下さった**。そして今、その「**キリストを知る**」という福音が、行進しながら前進している。将軍のパレードの際、**勝利を表す「お香」**が焚かれ、それを沿道の群集に振り撒きながらその列は進んでいたようです。パウロは、**キリストの勝利の行進に、この者も、コリントの教会の者たちも加えられているのだ**と言います。

もしかしたら、パウロは、この凱進行進には、戦いの捕虜たちも加わっていた、と言いますから、自分を「**キリストの捕虜**」として考えていたかも知れません。けれども、キリストの捕虜ということは、**キリストの僕**、ということです。キリストの僕とされた者は、**救われた喜び**を持って、**神様を賛美しながら前に進んで行く**のです。

## [3] ふさわしくない者を用いる神様

ここでパウロが強調しているのは「**香り**」ということです。**旧約聖書**では、香りとは、神様に献げられるものでした。つまり礼拝として、動物を燔祭の献げもの・生け贄として捧げ焼き尽くす。**その香りを神様は喜ばれました**。

ところが、イエス様が来られて、今度は、**イエス様ご自身が、神様のための最も尊い献げものになって下さった**のです。**イエス様の香りとは、十字架の愛の香り**に他ならないのではないのでしょうか？今は、**この香りが、キリストを知るという香りが、世界に満ちている**のです！そしてこの香りは、同時に私たち人間に**決断を迫るもの**です。この香りを、**神の愛の香りと嗅ぐことが出来るか否か**で、それぞれパウロが「**キリスト、わが内にありて生きるなり**」(ガラテヤ 2:20 文語訳)と言った幸いな告白を、自分のものとさせて頂けるかどうかの**分水嶺**だ、と言うのです。厳しいですね。しかしその背後には、イエス様の十字架という、誠に厳しい戦いがあったことを忘れてはいけないのだと思います。

パウロはその厳しさを良くわかっていたので、**16 節**でこう語ります。

**「このような務めにだれがふさわしいでしょうか。」**——誰も、私こそがふさわしいとは言えるわけではないのです。しかし、**信仰の世界には逆説があります。「ふさわしくない」と心から思う者を、神様は不思議にも捉えて下さって、神様のなさり方でお使い下さる**のです。神様の言葉というのは、**私たち罪人を再**

創造します。御言葉は、おみくじのような、その場しのぎのようなものではなく、私たちの心と体を貫くものです。

ですからパウロは 17 節で「**私たちは、多くの人々のように神の言葉を売り物にせず**」と言います。本当に神様の言葉が、**自分の存在の深みをとらえるものだ**、ということを知った者は、その神様に「**降参**」をするのです。「**お委ね**」をするのですね。パウロは続けてこう言います。

「**神の言葉を売り物にせず、誠実に、また神に属する者として、神の御前でキリストに結ばれて語っています。**」

彼は「**キリストに結ばれた者**」として、語っているのですね。「**結ばれる**」というのは、**一体となっている**、ということです。あのヨハネ福音書 15 章の「**ぶどうの木と枝のたとえ**」にあるように、弱く、ひん曲がったぶどうの小枝も、まことのぶどうの木に繋がられているので、そこから養分（聖霊）をたっぷり受け取って、果実を実らせて下さる、ということです。**小枝自身には何も威張る要素はありませんけれども、イエスという幹から離れなければ、神様はその小枝に確実に実りを与えて下さるのですね。幹の力です。**実は、これが、「**私たちはキリストの香り**」ということと同じ意味だと思うのです。つまり、私たちは何も **カんだり、自分らしくないことを無理してみたりするのではなく、イエス様と近くあれば良いのです！**

詩編の作者も言いました。

「**神は私たちの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである**」(詩編 46:1 口語訳)と。神様は「**いと近き**」お方なのです。私たちが自分から離れて行かなければ。

#### [4] 「キリストの香り」はおのずと香る

さて、「**キリストの香り**」ということですが、「**香り**」とか「**匂い**」とかいうことを思いめぐらしていた時、ふと「**おかあさん**」という歌（童謡）を思い出しました。昭和生まれの人はよくご存知でしょう。私ももちろん歌えます。

「**おかあさん なあに おかあさんて いいにおい  
せんたくしていた においでしょ しゃぼんのあわのにおいでしょ  
おかあさん なあに おかあさんて いいにおい  
おりょうりしていた においでしょ たまごやきの においでしょ**」

あかあさん、家事や料理にいそしんでいて、女性差別だなんて言われてしまうのかもしれませんが、この「**におい**」というものは、心にスーッと入ってきますよね。私は好きです、この歌。**子どもがお母さんの近く**にいて言うのですね。「**いい匂い**」って。それだけなんです。そうすると、お母さんは、それはシャボン（石鹸）の匂いでしょ、或いは卵焼きの匂いでしょ、と言います。

**何と幸せな空気がそこに流れていることでしょうか！**これは頑張って作り出した空気ではありませんよね？**おかあさんと子ども、その間に生まれている愛が、優しさが、「香って」いて、子どもはその香りを感じ、その香りによって生かされているんです。**(余計なことですけども、こういう時ってやっぱりお母さんなんですね。お父さんでは歌にならないのでしょうかね、ちょっと残念ですが…)。

「香り」というのは、また「その人」だとも思います。最近、育児放棄をしてしまった母親とその家族を描いた是枝裕和監督の『誰も知らない』という映画を見直していたのですが、まあ、形の上では捨てられてしまった女の子が、その姿を消してしまった母親の着物をしっかりと抱きしめているシーンがあり、胸を打たれました。その着物に染みこんだ母親の匂いをかいているんです。「匂い」は、その人が生きていることを伝えるものですし、また、人と人との繋がりを深く作るものだと思います。

「あなたがたはキリストによって神に献げられた良い香りです」(2:15)。アロマセラピー（香りによる癒し）ということがよく言われます。けれども、人工的な香りでなくとも癒されると思います。私たちの存在は、今、キリストの御腕の中であって、あの十字架の開かれた御腕の中でしっかりと抱きとめられているのです。母親がその子を抱くように。或いは、放蕩息子をその父親が待ち続け、抱きとめたように。イエス様と一つとされた私たちですから、私たちを通して、おのずとキリストの香りが周りに伝わって行くのではないのでしょうか？

### 【結】「安心」して、誠実に生きる

その香りというのは、この方にお委ねして良いという「安心」の香りです。

最近特に、政治の世界でもスポーツの世界でさえも、嫌気がさすほど「正直になれない」人々の姿が映し出されて息苦しくなります。嘘の上塗りは苦しくなるばかりです。けれども、例えば、あのアメフトの相手選手に怪我を負わせてしまった20歳の若者が名前と顔を出し、正直に謝罪したところから、ことは動き始めました。隠されていたチームの闇は暴かれましたけれども、良かったと思います。あの大学も立ち直っていくでしょう。

私たちは、いつも、神様の前における罪の悔い改めからしか始まらないと思います。そして、私たちはそれが出来るのです。なぜなら、神様がわたしたちをお赦し下さったのですから！その愛の中で、安心して生きれば良いのだと思います。もはや、何の力む必要はありません。パウロは2:17で「誠実に語り」と言っています。正直にあるがままということだと思います。飾らなくて良い。誠実に生きる生き方を神様が祝福して下さらない筈はありません。それは、「香り」となって、きっと他者を生かすでしょうし、何より、この世界にキリストご自身を証しする芳しい香りが広がることだと思います。私自身、この教会の皆さんから、キリストの香りをいつも受けて、生かされ、励まされ、今朝もご一緒に御言葉に与ることが出来ました。

「キリストにある交わり」が更に広げられて行くよう、祈り、進んで生きたいと思います。感謝してお祈りを致します。

主イエス・キリストの父なる神様、尊い御名を讃えます。

私たちはあなたに背いていた者です。しかし今や、あなたの一方向的な憐れみによって、あなたとの深い結びつきを新たに与えて下さいました。「あなた方はキリストの香りだ」という恐れ多い言葉を聞きました。けれども、あなたは香りがうつる程に、私たちと一体化して下さいました。そうであれば、私たちは安心して、日々の生活を誠実に生きたいと願います。主よ、あなたの愛をもっと分からせて下さい。この存在を持ってあなた映し出す者として下さり、み心のうちに用い下さい。

イエス・キリストの御名によって、お祈り致します。

アーメン。